

彗星だより

既報の如く、今年に去る一月十二日Wパーテ氏が本年最初の彗星発見者として、タトル彗星を発見し、次いで同一月十六日に南アフリカのプラスエイト氏が新彗星を発見した。此の二星は年初の天界を賑はしたが、何れも距離が遠く、程なく観測が不可能となり彗星界は暫らく寂れた。ところが近頃になつて、又々、新しい発見を報ぜられることとなつた。

コブ彗星——此の星が今年初めに近日點を通過する筈であることは本誌第61號第79頁にも記した所であるが地球からの距離が遠いので発見される見込みは少ないと思はれた。しかるに、流石に此の道の熟練家であるマクス・ワルフ (Max Wolf) 氏は、例のハイデルベルグ天文臺の強力なる寫眞機により、去る七月十三日1時52分(萬國時)に、

赤經 1h 17m 12s 赤緯(北) 18°14'

の所に此の彗星を発見したといふ通知が最近届いた。光度は16等である。これで見ると今年度の近日點通過は一月27.15日となる。しかし上記の様な微光星であるから、世界最強力の反射鏡寫眞によらなければ此の星は観測出来ない。——此の星は即ち 1926c と呼ばれる筈である。

フィンレイ彗星——此の星も亦今年中に近日點を通過する筈であり、其の日附は六月末らしいから、発見は非常に困難ではあるまいといふやうなことを本誌第61號第80頁に記した。大英天文協會 (British Astronomical Association) の年報 (Handbook) にも、此の星の近日點通過を六月二十三日として位置豫報を公表してゐる。しかるに、去る六月、東京の神田氏よりの通知によれば、蘆沼左千男氏は此の星の第四回出現の時 (京都の佐々木哲夫氏が発見した時) の諸所の天文臺での観測、即ち

1919年11月13日 佛國ベサンソンで

同 12月 19日 } 米國ワシントン及び
同 同 20日 } ヤーキースで、
同 同 22日 }

1920年3月8日 獨國ベルゲドルフで

同 同 9日 }

の観測を材料として新たに此の星の軌道を算出し、尙ほ神田氏は1920年一月17日から1926

年六月十五日までの間に此の星が木星から受けた振動を計算して、今年度の最も真に近い軌道を得た。(此の事は本會プレテン第77號に記して既に内外に通知した) 蘆沼氏の軌道要素は、(1919年の春分點を據れば)

近日點通過 1919年十月15日 48261
(カリニチ時)

近日點の引數 318° 8' 54.72
昇交點の黃經 46 55 39.8
軌道面の傾斜角 3 23 43.8
離心角 45 38 14.1
毎日の平均運動角 580.70868

であつて、神田氏が計算した本年の軌道は1926年6月15.0日(萬國時)の時に於いて、

平均の進度(M) 352° 20.4
近日點の引數 320 34.8
昇交點の黃經 45 18.0
軌道面の傾斜角 3 26.0
離心角 44 57.0
毎日の平均運動角 518.741
公轉週期 6.年8445
近日點通過の日 1926年8月7.2日

(萬國時)

神田氏は之れを基礎として六、七、八の三ヶ月間の位置豫報を發表し、觀測家の奮起を促した。(プレテン第77號)

しかるに、去る八月四日の我が諸新聞は、ナウエン無線報として、たゞ漠然と「フィンレイ彗星がドイツで觀測されてゐる」ことを報じ、ついで、翌日、吾人はコペンハーゲンの天文電報中央局からの公報を得た。其れによる、此の彗星はハンブルクのベルゲドルフ天文臺のシトベ (Stobbe) 氏が去る八月三日に発見したものであつて、其の発見位置はうし座で、

赤經 4h 3m 48s 赤緯 17°48'(北)

であり、光度は11.5級である。之れによつて見るに、近日點の通過は本年8月7.9日らしく即ち神田氏の豫報は一日以内に於て適中してゐることとなる。之れは神田氏のために祝すべきことである。

自分は、去る八月の中旬、鳥取縣浦富海岸に出張滞在中、中村要氏等と共に此のフィンレイ彗星を見た。光度は可なり淡く、約十級であつた。

——此の星は故佐々木哲夫君が第四回出現期に、1919年10月25日に発見したもので、實に我が國最初の彗星発見記録であつた。——今年に之れが1929d彗星である。(山本)